
櫻の頃

ame*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

櫻の頃

【Nコード】

N6899B

【作者名】

ame*

【あらすじ】

レトロな文体で綴る小説書きと桜の季節との短い物語。縦書きとルビ付だと一層雰囲気が出ます。

（前書き）

歴史的假名遣ひは、必ずしも正確を期してをりません。
ルビ入り縦書きでお読みになられると、雰囲気が出るかも。

「死ぬのなら、櫻の頃が好みねえ」

宮原君がポツリと云った。

三月の半ばとも成れば随分と暖かい日だったので、居間の障子を
開け放つて外の微風を招くのが心地良ゐ。縁側からずっと先の空
地の向かうには何本かの櫻の木が竝んで立つて居り、その見頃には
中々の絶景なのだが、未だ、其の時期には僅かに至らないやうだ
つた。

宮原君の言葉と、美和子さんが茶碗や急須を乗せた盆を手に勝手
から戻つて來たのと丁度同時だった。

「死ぬだとか何だとか、唐突に奇矯な事を仰有ひますことね」

美和子さんは、たゞ物静かに半ば微笑を浮かべるやうな調子でさ
う云つたのであつて、咎めるとか窘めるといふ感じは微塵も無かつ
たのだが、小生には美和子さんが心中穏やかならざるのを努めて表
に出さぬやう押さへてゐるのではと思ふ處が有つた。

宮原君は肺病を患つてをり、而も病魔は彼の臟腑に可也侵攻して
居るらしひ。今日は春先で陽氣の良いたらうか、彼が咳込むのを
未だ見ては居なかつたが、其のやうな譯で、美和子さんは彼の口か
ら死等と云ふ言葉が出ると胸中穏やかで無くなる事は想像に難く無
ひのだった。

正式な結婚は未だで、美和子さんは宮原君より二つ年上であるが、
善く世間で云ふ「金の草鞋を履めても探せ」のやうに食事の支度か
ら家の諸々の事から病身の彼の面倒まで誠に甲斐甲斐しく盡くして
呉れてゐる。

實家は京都の由緒有る古寺ださうで、實を明かせば、二人の生活

費も、否、宮原君の小説の出版費用さへ何と其の實家から出て居るのであった。詰り、既に其の素行に依り勘當の身で親の援助を願ふべくも無い宮原君が毎日滋養を付ける食事から、文士としての體裁を整へる事までも、須く彼女の實家のお世話に成つて居るのである。然り乍ら宮原君はインテリゲンチア振つて耶蘇教に氣觸れ、聖書を持ち歩いたり、事ある毎に其處からの言葉を引用したりする随分と能天氣な性分なのだった。

小説家を名乗り乍らも人間の心理に甚だ疎い宮原君は、そんな美和子さんの胸中を慮る事も無いらしく、茶を一口啜り、煎餅を慌しく噛み碎ひて喉に送込むと、小生の方に顔を向て先程の話題に戻った。

「だつて、秋に死ぬのは何だか物寂しひし、冬となつたら餘計心細さうだ。かと云つて、夏の暑苦しひ中で死ぬるのは気分も格好も良いものでは無いだらう。第一屍骸が直ぐ腐るから傍の者が迷惑ぢやなひか」

其れまでは、其の場に居りながら、外の春めく様を眺めるなどして心此處に有らずといった態の美和子さんだったが、我々の会話は確りと聴ひてゐたらしく、彼女は宮原君に流し自然とした視線を送つた後、些か皮肉な調子で云つた。

「貴方のやうな無頼派でも、他人様の迷惑など考えはる事が有りますのね」

美和子さんの言葉と表情の中に、小生は微かな嶮が在つたやうに思つたのだが、僅かな物とは云へ其のやうな彼女を見たのは後にも先にも此の時だけである。とは云うもの、其処は勿論、美和子さんの事であるから、決して嗜みを缺くやうな風情では無い。

其んな彼女の事は何處吹く風で、宮原君は舞台で口上を述べる役者のやうに、視線を何處か遙か遠方に向けながら話を續けた。

「其れに、生き残^{のこ}つた者達は毎年春に成れば、櫻が咲いたり散ったりするのを見て、僕の事を想ひ出す事だらうしね」

櫻の木の下には屍體^{したひ}が埋^うつてゐる等と云ふ話が小生の口元まで出て來たのだが、實際其れをするのは思ひ留^{とど}まつた。余りに凡庸なのと何だか美和子さんに苦しむ思ひをさせるやうな氣がしたからであつた。

宮原君が亡くなつたのは、其れから二週間ほど経つた日の事である。

報せを聽ひた小生が宮原君の家に駈^{かけ}付けると、表の木戸^{とらひ}の處で、ちやうど入代はるやうに出て來た黒っぽい背広の二人組と擦違^{すりか}つた。片方の男は鳥打帽^{ハンチング}を被^かつていたが、相方に「今頃は良く有るんだよ木の芽時だからねえ」と云つてゐるのが聽こへた。其の二人はどうやら刑事のやうであつた。敷地から外の道に出ると、鳥打帽^{ハンチング}は煙草を取り出して相方にも奨^{すす}め、マツチを摺^{すり}つて火を点けて遣^やつてゐた。相方は恐縮した様子を示してゐたが、だうやら鳥打帽^{ハンチング}の方が階級が上らしひ。

一仕事終へた後の清々しさからであらうか。二人は煙を大きく吸込むと、是れぞ正しく春の色と云ふ感じのやゝ鈍い空に向かつて放心するやうに吐出すのだった。

宮原君の死因は自殺^{やそ}だった。耶蘇^{やそ}教では自殺は大罪なのだが自ら命を絶つ信者は意外と多いさうだ。生活が困窮^{わづ}してゐた譯^{わけ}では無いし病苦に堪へ兼ねても無いらしく、世間一般^{はかな}が、だうにか納得するやうな理由を付けるとしたら、世を儚^{はかな}んでと云ふのが適當^{てきたう}であらうか。

遺書には「世界は甚^{はな}だ不可解哉」とあつたが、是れは彼が常日頃、和歌の枕詞や耶蘇^{やそ}のアーメン、法華の御題目の如く、事有る毎に唱へてゐた言葉で有る。

二人が住んでいた家は其の後、無人のまゝのやうだ。昨今、近邊では首吊りの家と呼ばれるやうに成ったから、餘程酔狂な者以外は店子にならう等とは思はないだらう。大家さんは元は某纖維會社の事務員をしてゐて、定年後は親が残して呉れた数件の小さな家から上がる家賃で老妻と暮らしているさうだが、収入の可成の部分が斷たれているであらうから、宮原君も罪な事をした譯で、大家の老夫婦は同情に餘り有る。

美和子さんはその後、或る小説家と結婚した。相手がやはり文士なのは、彼女の宿業なのだらうか。だが、其の小説家は賣れっ子だから實入りも多いやうである。世の常として夫君が活動寫眞の女優やカフェーの女給などと浮名を流す事は多々在るが、美和子さんは二人の子供もまうけて一應幸福な家庭生活を營んでゐるやうだ。

あれから幾年目かの櫻の季節となり、小生は花瓣の舞ふ中で、ふと、宮原君の事を想ひ出したりもする。彼が出版屋の口車に乗せられ費用自分持ちで作った本の一冊は小生の部屋の書棚に未だ有るが、其の他の千部程は何處に收まつてゐるのだらうか。ま、殆どは獻本だった筈である。

宮原君の名前や作品が文學史に残るであらう氣配は、今の處、無ひ。

櫻の頃 「了」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6899b/>

櫻の頃

2010年10月9日15時50分発行